

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrights materials of the authors.

## 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター(IRC)ワークショップ報告

タイトル：「複雑系としての社会システム研究の可能性を考える：言語体系を例に」

日時：2016年3月4日（金）14時00分～17時45分

場所：AA 研セミナー室(301)

参加者：12名

内容：

### 1. ワークショップの趣旨（中山俊秀：情報資源利用研究センター長）

言語の研究における従来の枠組みでは、言語活動は基本的に生得的な人間共通の言語能力として規定される規則体系による文の生成であるとされ、また言語表現のすべては全体的な統一性のある規則体系への集約可能性を有することから、言語能力は自己完結性を有する固定的な知識体系であると捉えられてきた。しかし、言語はその通言語的多様性のみならず、単一言語内でも様々な面における多様性を有し、しかも常に変化し続ける動的な体系でもある。言語を均質で固定的な体系として捉え、理解・説明しようとする今の言語研究から、言語を恒常的变化を本質として含む動的な体系、つまり、決定論的・還元主義的方法では捉えられない複雑系的現象として再考するための契機として、複雑系に類する研究対象を持つ分野の研究者から、現在の研究動向や研究課題などを提示して頂くのが本ワークショップの趣旨である。

### 2. 各ディスカッサントの報告

伊藤克彦（京都大学医学研究科分子病診療学）

多細胞生物の層的ネットワーク構造と、「言語」と「細胞内分子ネットワーク」が同じシステムで語れる可能性

森浩禎（奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科）

大腸菌の遺伝子が作り出すタンパク質同士のネットワークによって引き起こされる生命現象の複雑系的特徴

阿部明典（千葉大学文学部行動科学科）

アフォーダンスやアブダクションにおける複雑系的特徴や創発的事象を惹起させる「仕掛け」

村井源（東京工業大学大学院理工学研究科価値システム専攻）

聖書のテキスト解釈を、語のネットワーク解析などの計量的な手法を用いて行う分析

内海彰（電気通信大学大学院情報理工学研究科）

言語認知の計算モデルの一つとしての、意味の幾何学モデル、特に潜在意味分析を代表とする意味空間モデルの認知的性質の解明および意味空間の新たな構成手法